

## 関西支部勉強会レポート

### 第24回関西支部勉強会

#### 科学技術政策形成への参加障壁を緩和する試み

日時 2012年10月29日(月) 18:00-20:00

場所 京都大学 吉田泉殿

ゲスト 山内 保典 氏(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任助教)

人数 16名

科学技術について議論してみたいけど、行動に移せない人(中関心層)がいます。

今回は、中関心層にとっても参加しやすい場を提供する試みと、そこから見えてきた科学技術政策形成への参加障壁とその緩和に関する知見を紹介します。

簡単に言うと、科学の知識を使ってどういう社会を作りたいのかを、市民を含めてみんなで考えるためには、どういうコミュニケーションの場を設計すれば良いかというお話です。

#### 1. まずは山内さんの自己紹介から

学生時代は、認知科学(人が頭の中でどのように物事を考えているのか)を研究していました。博士課程では、科学において「正しい」と判断する基準を、学会のコミュニティの中でどのように作っていくのか?ということの研究していました。

例えば、「神の手」で有名になった旧石器発掘ねつ造事件。発掘される石器は、どのように「科学的に正しい」あるいは「にせもの」と判断することができるのでしょうか?考古学のコミュニティの中で、その判断基準が作られていったディスカッションを分析しました。

↓

そこから、科学について色んな人が参加して話すことに興味を持っていました。

最初の就職先では、天文学に寄付をする市民にインタビューをして、寄附の理由を調査していました。すると、

- 天文学の偉い先生としゃべれる、飲み屋や商談でその話をする受けが良いから
- お星様の話が好きで知りたいから
- 研究者が気さくで良い人だから、手伝わないと

## 関西支部勉強会レポート

と、一枚岩ではないことが発覚。市民は、寄付という行為をそれぞれの生活の文脈の中に取り入れているのです。

この3月までは、「市民と専門家による熟議と協働」というプロジェクトに関わり、科学技術と社会とが、どのような関係にあるのが良いかを、専門家だけでなく市民も考える対話イベントを開いたりしていました。再生医療を例にとれば、

- 再生医療で難病が治るけれども、どれだけ税金を投資すべきか
- 医療費が高騰しているけど、本当に長生きを目指すことが良いことなのか
- 医療を受けられる人、そうでない人の格差が出てくるのでは

といったことについて、参加者同士で話し合いました。

今は、大阪大学の「公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）」で、今まで政治家が、えいやえいやと決めてきたことを、市民の声などの“質的データ”もみていく、そして、それができる学生を育てていこう！というプロジェクトを担当しています。

Q. 今でも STiPS では認知科学を研究されているのですか？

A. 今は、インタビュー調査をよくやっていて、政治に対する不信感とか、自分が一票を投じて何も変わらないんじゃないか、といった意見を分析するために、心理学の指標を使っています。

Q. 今の専門は何ですか？

A. 心理学だと言い張っています（笑）。どうしてもモノの考え方が心理学で、制度ではなく、やはり個々の人間がどう思っているかに注目してしまいます。

## 2. 次に「中関心層」とは何か、議論への参加が彼らにもたらすものについて

夏に、原子力発電所についての国民的討議が開かれました。エネルギーについて、国民全体で議論を深めたいというイベントでした。

こういう対話の場をどう設計するのか、そこで出て来た意見をどう活かしていくのか、を主に研究しています。

そこでは、誰の意見を尊重するのか？誰の意見をもってして、ものごとを決めるのかという調査をしました。結果は次の4通りに分かれて、

## 関西支部勉強会レポート

- ① 代表民主制（投票等で選ばれた代表者（議員）が議論する）
- ② エリートによる議論（専門家、エリートが決める）
- ③ 国民投票（ひとり一人が一票を持って決める）
- ④ 国民による議論（上のイベントの様に、一部の国民が寄り集まって議論する）

①はこれだけ政治不信だと言われていても、50パーセント以上の方が重視。②は40パーセント程度が支持。③を重視する人がやや多く、④を重視する人は少ない。

↓

市民参加は可能な選択肢だろうか？

というのも、市民は普通の人々の判断をあまり信用していないのではないだろうか？ 加えて、日本では市民運動といった言葉にあまり良いイメージがないのでは（政治的発言をする人や、もの言う市民）？ さらに、少人数で議論すると声の大きい人の意見がまかり通るという懸念があるのでは？

↓

集められた意見（自由記述）からは、「熟議」に対して人があまり良い印象を持っていないことが分かりました。他にも、政策決定に影響する議論に参加するのは責任が重すぎる、自分では力不足だといった意見がありました。

↓

こうしてみると、市民参加ってそもそも要らないのでは？

山内さんの立場は「そう判断するのはまだ日本は早すぎる！」。

どの意見も経験に基づいたものではなく、印象での解答なので。これから、市民の熟議への参加の機会を増やし、実践の場の質を上げていくのが自分の仕事。その上で、日本で市民参加を導入するかどうかを考えて欲しい。

そこで、

- 自分が参加するのは気が重い、忙しい、仕事もある、という気持ちを変えていきたい
- 中関心層（分かっちゃいるけど始められない人、議論したいと思っているけど行動に移せない）に、最初の一步をどう踏み出してもらうか？

これは研究者や専門家にも同じことが言えます。市民の方と話してみたい、政治的な発言をしてみたい（が、コストがかけられない）。若手研究員で科学技術政策についても

## 関西支部勉強会レポート

のを言いたい、でも機会がないという人達もいるはず。

### 3. では熟議に対しての悪いイメージ、食わず嫌いを変えていくには？

World Wide Views in Japan（世界 40 カ国で行っている）というイベントに焦点を当て「実際に参加経験をすることで気持ちが変わるのでは？」という考えから参加者対象の調査をしています。このイベントは、地球温暖化の問題について、京都議定書の後の取り決めを作る時に行われた COP15 という世界的な会議に、各国 100 人、全世界で 4000 人あまりの市民の声を取り入れようとしたイベントです。

地球温暖化について何か活動をしていたり、職業柄とてもつながりがあったりという人を除いた、いわゆる“一般市民”を集めて、議論をしてもらいました。一日朝から晩まで 8 時間くらい議論をしつくすというイベントだったのですが、参加者は、

- 意外とみんなちゃんとした意見をもっている、市民は市民同士で捨てたもんじゃないということを見
- PA など良いイメージを持っていなかった人が、市民同士の議論に良いイメージを持った
- これまで関心の無かった温暖化に興味を持ち始めた

という感想を持っていました。やはり一度参加をしてみることで、それまで高かった議論に対する心のハードルが下がったり、人を通してマスコミにはのらないローカルな知識を聞くことができたりと、心の面でも知識の面でも好感を持ってもらったようです。

市民は、専門家や政策決定者とは違う視点をもっています。結局、政策のもとで生きるのは市民であるのだから、実際に効果のある政策を作るには自分達の意見が重要だろうと、民主主義のかたちを改めて実感してもらったりもしていました。

ここまでで分かることは、

とりあえず 1 回議論に参加してもらえれば、心的障壁が下がる。そして、引き続き参加してもらうことができる。

そこで重要になってくるのは、

その場に来てもらわないと体験してもらえなくて、しかも品質も変化していくサービスをどう人に伝えるか。気軽に体験できる「試食」のような場をどんどん設計して、そこに参加してもらうのが一つの手段だろう。

## 関西支部勉強会レポート

### 4. どのように議論を実践していくのか？

今まで科学コミュニケーションは、何日も缶詰になって議論をするハードな場 or 1 回限りの場（次に繋がらない）でした。そこで、いかに軽い場で、議論を次に受け継がせて、政策決定にも通用するような深い議論にもっていくかを考えていました。

最初にやっていたのは、参加しやすい場、開催しやすい場を作ろうとしました。

↓

- 専門家を呼ばない（紙芝居で説明）
- ゲーム感覚で出来る（それぞれの参加者に役割をふる）
- ファシリテーターをおいて、みんな平等に発言できる
- これらのマニュアルを用意して、いろいろなところで複数回開催できる

九州から東京まで、色々な地域で 13 回熟議キャラバンを開催しました。意見をカードに書いてもらい、それを次の場でも使うことで、それぞれの会での議論を繋げていけるようにもしました（熟議は必ずしも一カ所で顔を付き合わせて行う必要はない）。社会全体での熟議をなんとか擬似的にできないかを考えていたのです。

「私が一番重要だと思う意見」を、市民、専門家問わずカードに書いてもらい、市民と市民、市民と専門家、専門家と専門家を繋ぐ、色々な意見が交差し合う場を作りました。さらに、再生医療学会や行政にその意見を持ち込んだりもしました。

### 5. 話し合う文化をどう社会に根付かせるか？

ひとつは大学での教育だろうということで、論点をカードにして学生に配り、面白い意見、これは理解しがたいといった意見を互いに紹介できる授業を行っています。

↓

異なる選択肢でも共通しているところがあります。同じ選択しでも、意見・価値観がいろいろあるということが分かります。一概に賛成・反対に分かれるのではなく、賛成でも、なんでそれに賛成するか理由は多岐にわたるのです。

授業でやっていることを組織的にどう行っていくのか？

↓

- 教養教育の見直しを進める他の大学に、この手法の売り込みを仕掛けている
- 市民参加の熟議の場に、学生も参加させる

## 関西支部勉強会レポート

こうやって個々の場で実践される熟議で出た意見を集約し、政府に助言していくような組織ができないかも考えています。

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第24回勉強会・記録担当 中山陽介

第24回勉強会・運営担当 水町 衣里、秋谷 直矩（京都大学）、加納 圭（滋賀大学）